

第4章 小学校で「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を育てるには

1. はじめに

進路指導が中学校・高等学校などの中等教育諸学校における教育活動として位置付けられてきたのに対し、キャリア教育は、幼児期の教育から高等教育・継続教育までを一貫する教育活動として構想されてきた。そのため、現在の小学校教員には、キャリア教育の担い手としての役割が期待されている。

しかし、進路指導に取り組んできたという蓄積がある中学校・高等学校に比べ、小学校でのキャリア教育の実践は取り組まれ出してからそれほど時間がたったわけではなく、その指導状況にある種の「偏り」が生じている。「基礎的・汎用的能力」と照らし合わせて述べると、現在の小学校のキャリア教育では、「人間関係形成・社会形成能力」や「自己理解・自己管理能力」を育成しようとする授業・指導に比べて、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に向けた取組はやや不十分であるといえる。「総合的実態調査」に基づく『第一次報告書』では、小学校6年生の学級担任が「よく指導している」こととして挙げる割合について、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」に関する項目では高く、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関する項目では低いということを指摘している（『第一次報告書』14ページ）。

では、小学校でのキャリア教育の指導状況には、なぜこのような偏りが出てしまうのだろうか。また、そうした指導状況の偏りを克服していくためには、どのような手立てが必要になるのだろうか。

本章ではこれらの内容について、「総合的実態調査」の分析を行う。分析に用いるデータは、小学校を対象とした(A)「学校調査」(回収数：995通)、(B)「学級担任調査」(回収数：1,681通)、(C)「保護者調査」(回収数：4,008通)の3種類の調査である。

2. 小学校でのキャリア教育の指導状況

『第一次報告書』にもあるように、「キャリア教育を行う上で重点をおいて指導していること」の中で、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関する項目を「よく指導している」と回答している小学校6年生の学級担任の割合は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」に関する項目に比べて少ない傾向にある(図1)。

これらの指導状況の偏りは、保護者のニーズに応えた結果というわけではない。「保護者調査」では、同様の質問項目を用いて、保護者にそれぞれの項目についてどの程度指導してほしいかについて尋ねている。図1は、学級担任が「よく指導している」と回答した割合と、保護者が「重点をおいて指導してほしいと思う」と回答した割合を縦に並べたものである。図1からは、保護者が「人間関係形成・社会形成能力」の育成に向けた指導を強く期待するだけでなく、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」についても、「自己理解・自己管理能力」とほぼ同様に重点をおいて指導してほしいと考えている様子がうかがえる。そのため、特に「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」で、学級担任の指導状況と保護者の指導へのニーズにズレがあることが見いだせる。

なお、「学校調査」からも、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に向けた授業・指導が不十分になりがちである様子がうかがえる。各学校での「基礎的・汎用的

能力」の育成に向けた授業・指導の実施率を、低学年・中学年・高学年にわけて示した（図2）。「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に関する授業・指導は、特に低学年・中学年で、指導に取り組みれていない傾向がある。

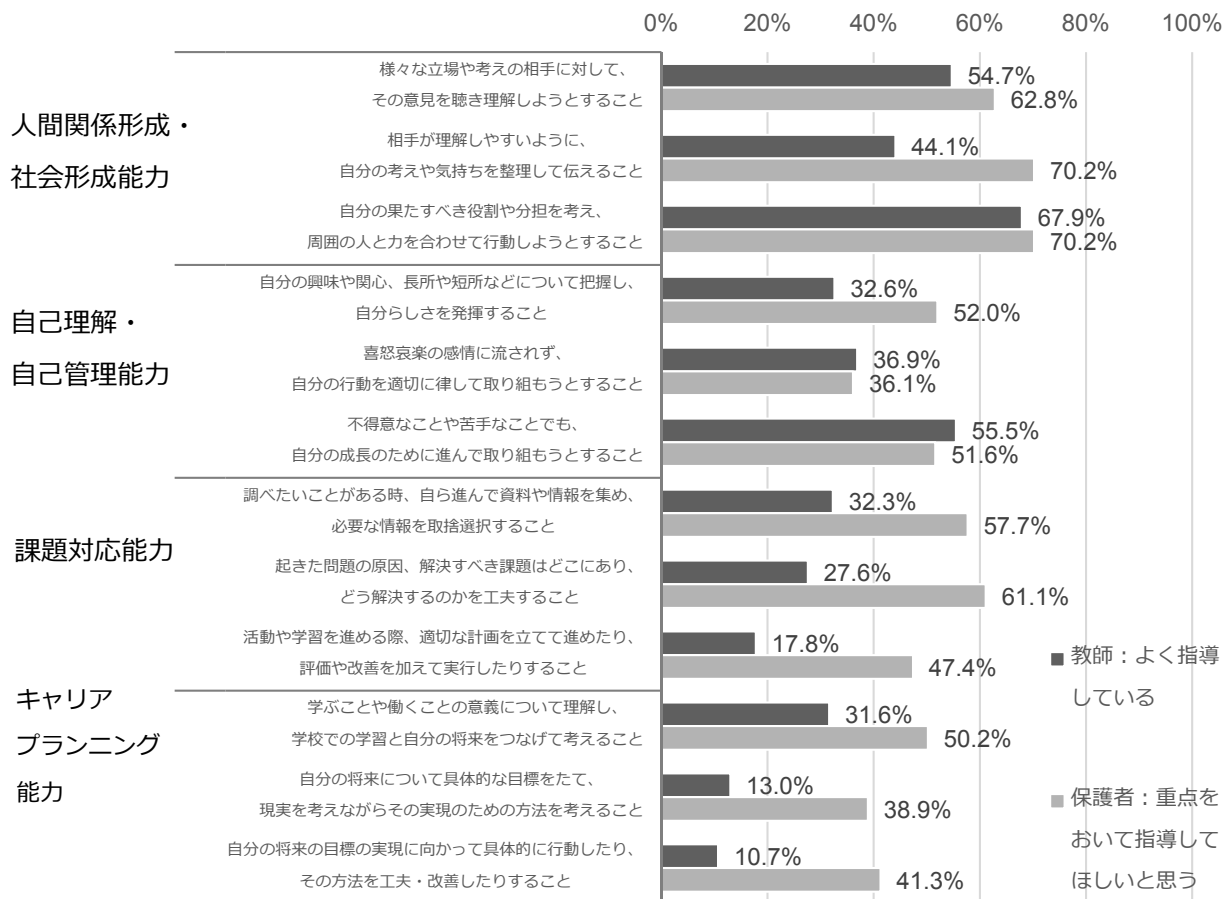


図1 学級担任の指導状況と保護者の指導へのニーズ

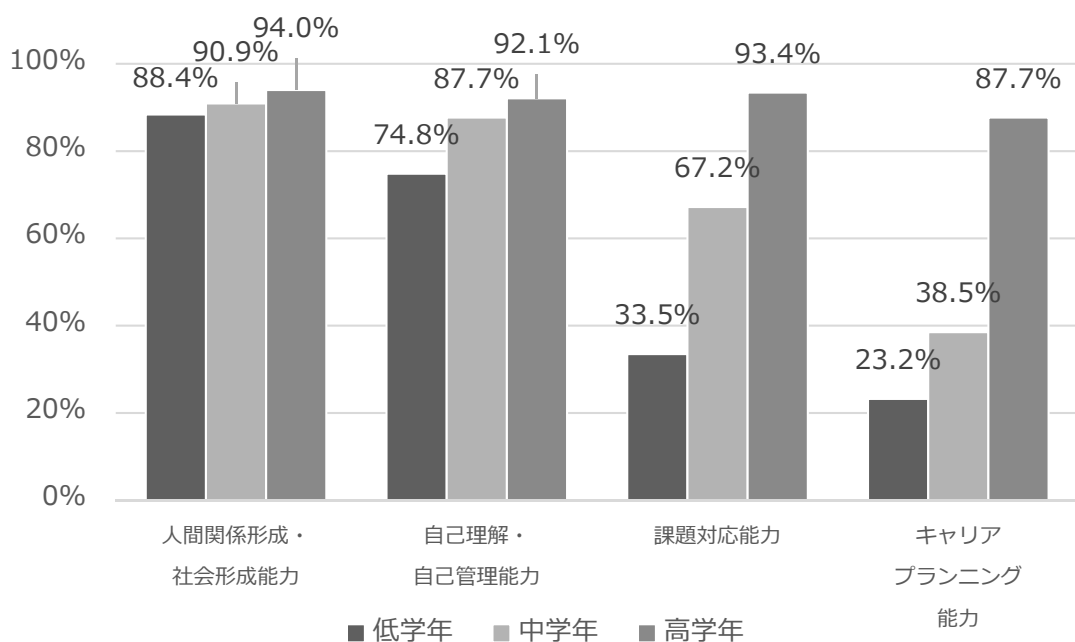


図2 「基礎的・汎用的能力」の育成に関する授業・指導の実施率

3. 「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関する指導が不十分になる背景

では、なぜ小学校でのキャリア教育では、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に向けた指導が不十分になりがちなのだろうか。その理由として、授業の実施者である教師たちが、指導の内容や方法をどのようにしたらよいかわからないという点があると考えられる。

「学級担任調査」に関して、図1で挙げた「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況についての六つの質問項目と、「学級のキャリア教育について困ったり悩んだりしていること」に関する質問項目（9項目）の回答結果について、その関連の強さを確認した（詳細は参考資料付表4-5を参照）。その結果、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況についての六つの質問項目と最も強い関連が見られたのが、「指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」という質問項目であった（図3）。

図3から確認できるとおり、「指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」を選択している学級担任は、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関して「よく指導している」と回答していない傾向にある。図3の結果からは、小学校教員たちは「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」を育成するための指導の内容や方法がわからないからこそ、それらの育成に積極的に取り組めていないということが予想される。

一方で、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に積極的に取り組んでいるのはどのような教員なのだろうか。図3の分析結果からは、それらの育成に関する指導の内容や方法がわかっている教員だということが考えられる。そして、図4・図5からは、キャリア教育の実践について学ぶ機会が、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に関する指導につながっているという様子が見いだせる。

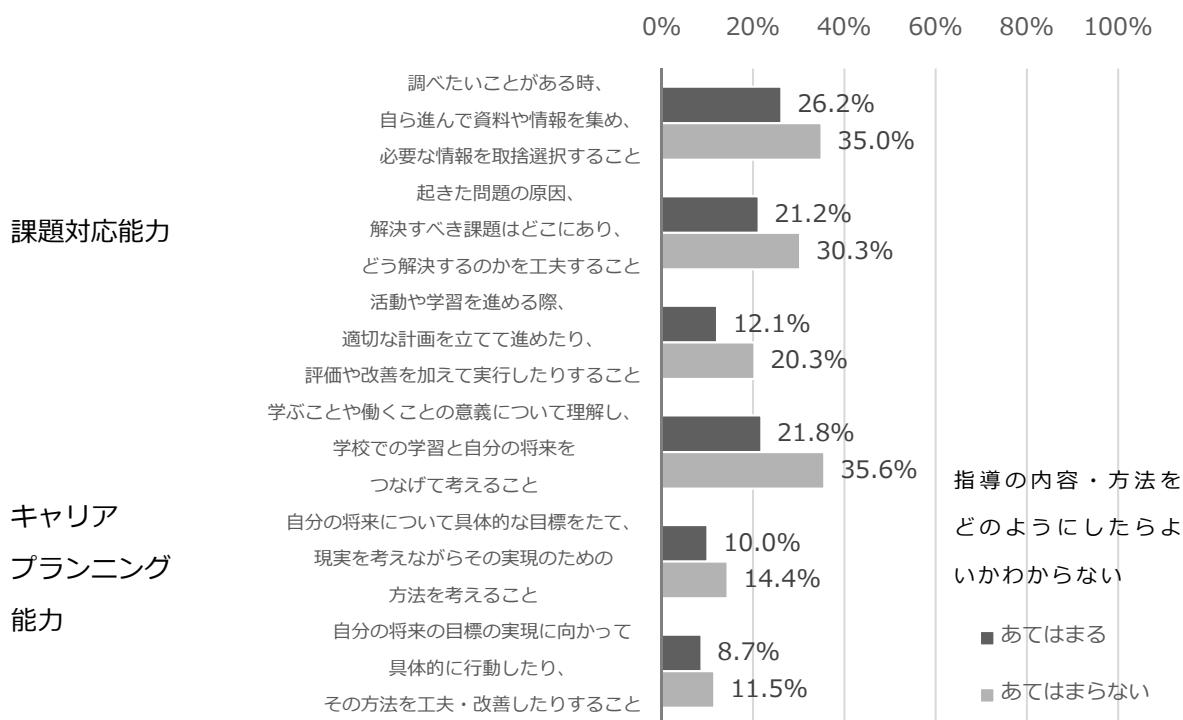


図3 「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況と「指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」との関連

「学級担任調査」について、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況についての六つの質問項目と、「今年度参加した（参加予定がある）校内研修会」「学校外における研修等への参加状況」について尋ねた質問項目（計6項目）の回答結果について、その関連の強さを確認した^(注1)。その結果、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況についての六つの質問項目と特に強い関連が見られたのは、「(校内での) キャリア教育の授業実践に関する研修」と「ほかの小学校のキャリア教育に関する授業研究会」への参加の有無を尋ねた質問項目であった（図4・図5）。

図4から確認できるように、校内でキャリア教育の授業実践に関する研修を受けた教員（受ける予定がある教員も含む）は、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関して「よく指導している」と回答している傾向にある。また、図5から確認できるように、過去5年間にほかの小学校でのキャリア教育に関する授業研究会に参加した教員も、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に関して「よく指導している」と回答している傾向にある。図4・図5からは、校内外でのキャリア教育の実践に関する研修・授業研究会に参加することができれば、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の育成に向けた指導の内容や方法を習得でき、指導に積極的に取り組めるようになるということが予想される^(注2)。

ただし、こうした学びの機会を得ていた教員は少数派である。当該年度にキャリア教育の授業実践に関する研修に参加した（あるいは参加予定の）教員は14.8%、過去5年間にほかの小学校のキャリア教育に関する授業研究会に参加した教員は13.6%しかいなかった。

校内外での研修や授業研究会に参加する機会をどのように作り出していくのかについては、今後の課題であるだろう。

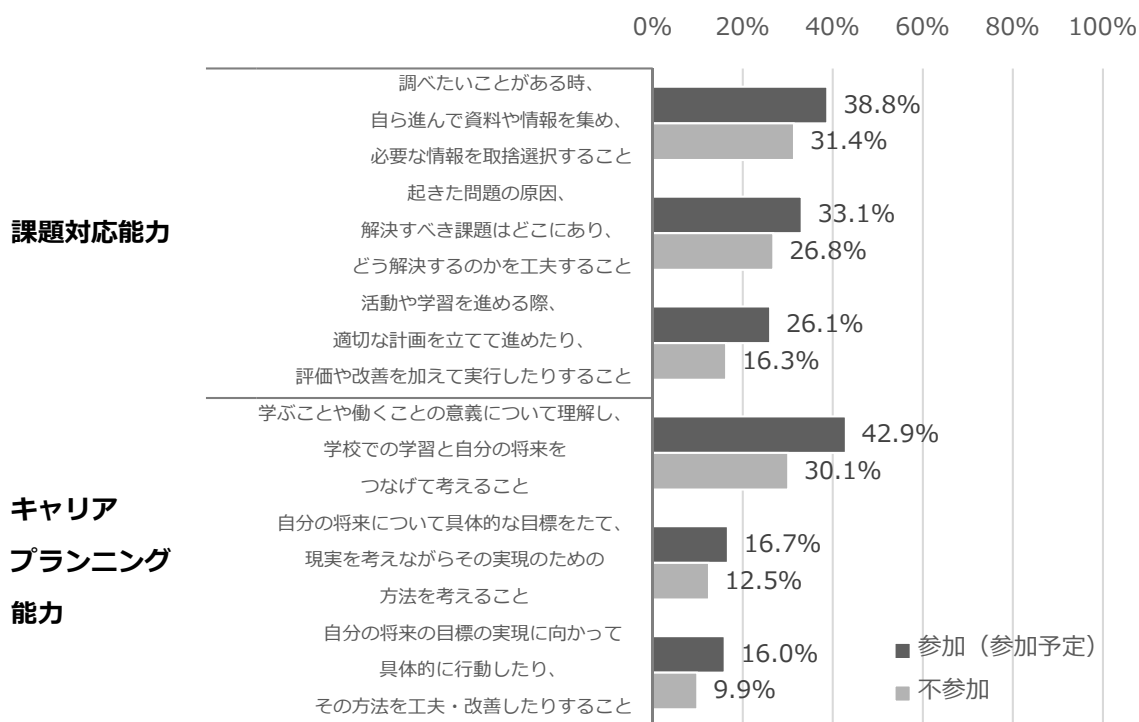


図4 「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況とキャリア教育の授業実践に関する校内研修への参加との関連

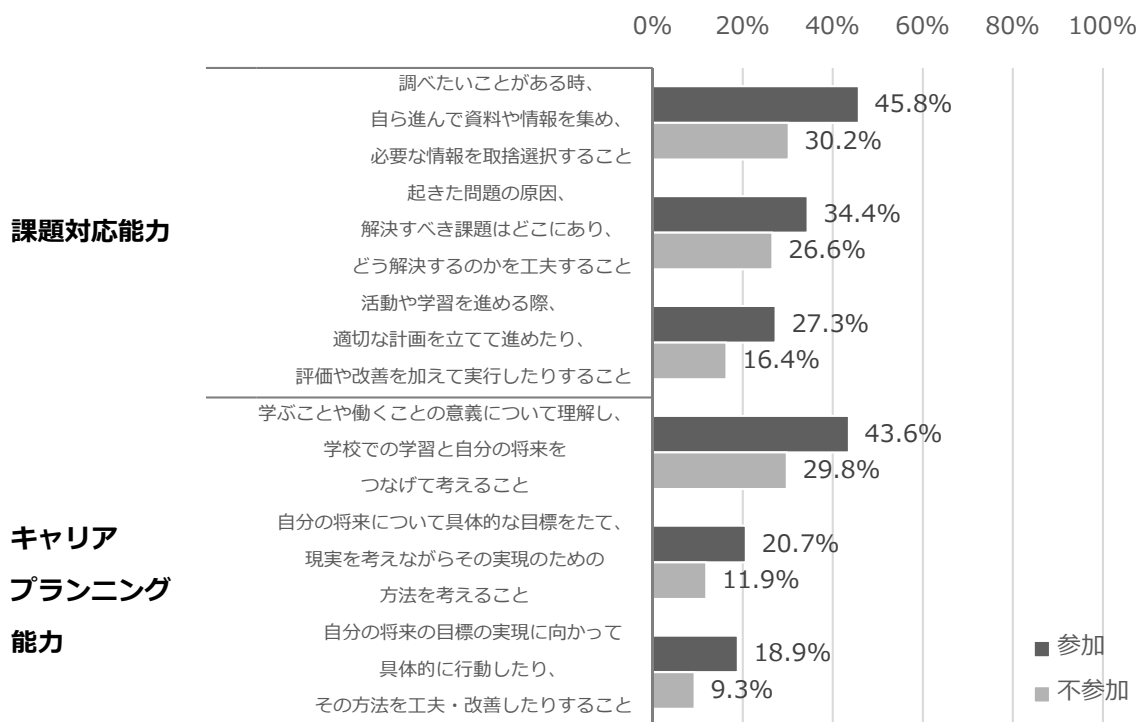


図5 「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の指導状況とほかの小学校のキャリア教育に関する授業研究会への参加との関連

4. まとめと考察

以上の分析結果からは、小学校のキャリア教育では「課題対応能力」と「キャリアプランニング能力」の育成に向けた指導に重点が置かれにくい様子が見られた。これらの指導が不十分になりがちな理由としては、教員たちが指導の方法や内容についてどうしたらいいかわからないという点があることが見いだせた。そして、これらの指導を充実させるには、校内外の研修や授業研究会への参加が有効であることがうかがえた。

ただし、キャリア教育の実践に関する校内外の研修・授業研究会に参加した教員は少数派であった。この点については、近年の教員の多忙化の中で、キャリア教育に関する研修の実施や、校外の授業研究会への参加にまで、手が回らないというのが現状なのではないだろうか。

各小学校教員によるキャリア教育の創意工夫を支えていくためには、各教員の時間の余裕をなるべく奪わない形で、校内外での研修や授業研究会に参加できるような仕組みを整える必要がある。教員に時間のゆとりを作ることこそがキャリア教育の推進には重要であるということ、押さえておくべきだろう。

(注1) 詳しくは参考資料欄の付表4-6を参照のこと。

(注2) 他校の授業研究会への参加については、「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」についてよく指導しているような熱心な先生だから、他校の授業研究会に参加しているだけなのではないかという、逆の関連性を予想することもできる。しかし、その場合でも、他校の授業研究会に参加することで、「課題対応

能力」「キャリアプランニング能力」について指導できるようになり，更に他校の授業研究会に参加する熱意がわき……というように，授業研究会への参加と指導の充実は連鎖の関係にあるのではないかと考えられる。